

---

# EPITAPH

翡翠

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

EPIGRAPH

### 【Nコード】

N1004A

### 【作者名】

翡翠

### 【あらすじ】

輪廻の輪は、俺を縛り付けるのか  
翻弄されていく少年の意味とは。

？『黒い太陽』に運命を

## ブローグ

目を閉じれば見えてくるのは

『…………だ。』

赤い、紅い自分の手

『…………イヤ、だ。』

目を開けば見えてくるのは

『タスケテ』

暗い、黒い漆黒の太陽

『ウワアアア!!』



## #1 夢

ジリリリリと、騒がしい目覚ましの音で目が覚めた。

布団の中から伸ばされた手が机の上を数回叩き、四回目にしてようやく目覚ましを止める。

「……………寒い。」

止めた目覚ましから手を離すと少年は布団から名残惜しそうに顔を出した。

未だ眠いのか薄く開いた目を軽く擦ると大きなあくびを一つ。静かになった部屋の中に外で飛んでいるスズメの声が何十にも重なって飛び込んできた。

また、あの夢。

心の中で呟くと少年・光雲亘屡は光が差し込んでくる窓の前に立って伸びを一つする。

こっちゃん わたる  
光雲亘屡現在白鷗中学3年。

背中まである髪を束ね、一見女のようにも見えるがれっきとした男。野球部に籍を置き、ショートレギュラーで副部長。

黒い、太陽……か。

亘屡は横目で自分の掌を見た。夢の中では真っ赤に染まっていた手。空には見たこともない、真っ黒な太陽が浮かんでいた。近くにある

かと錯覚するほど大きな太陽が。  
ぎりと齒軋りすると掌を力強く握った。

「おっはよ、亘屢！」

「おう、おはよ。」

教室に入った亘屢に一番早く声をかけてきた少年は満面の笑みで近づいてきて後ろ手に隠していたモノを亘屢の眼前に出した。

「……………おい裕也。」

一冊の雑誌の表紙を見た亘屢は一瞬目を見開き、すぐに視線を裕也と呼ばれた少年に戻した。

「あれ？興味ねえ？」

「当たり前だろうが馬鹿。」

「亘屢の好みかなあとか思ってた来たんだけ？」

「好みじゃないし興味もねえつつの！」

「何っ！？お前それでも健全な男子中学生か！？」

「不健全な男子中学生がそれを言うか！？」

雑誌の表紙にはおそらく雑誌の名前だと思われる『和ノ美』という文字と着ている着物を頬を染めながらもずらしている女性の写真。

「確かに俺は和風は好きだぞ！？だけどボルノには興味ねえ！」

「あれ。そうだったの？てつきり亘屢はムツリスケベかと……………」  
悩むように顎に手を当てた裕也の鳩尾に蹴りをいれると一直線に自分の席に向かう。

後ろの方で裕也が思いつきりむせているが自業自得だと放っておくことにした。

### #3 壊れていく日常

タスケテ…………

『誰だよ、お前』

タスケテクレ

『俺はお前なんか知らない』

オレハ…………

オマエダ。

「うわあああっ！」

「何がうわあだ光雲。」

「え、あ、え！？」

がばと立ち上がって周りを見ると授業中。クラスメイトは一瞬不思議そうな顔をする和一斉に笑い出す。

「授業中だぞ？」

「……………みたい、っすね。」

すいませんと小さく謝ると教師は納得したように教科書を読み始めた。

亘屢は溜息を吐くと窓の外を見る。

黒い、太陽。

「……………」

夢で見た太陽とそっくりな太陽が青空に浮かんでいた。

オレハ…オマエダ。

誰だよ、お前……

何だよ、あの太陽……

亘屢は恐る恐る自分の手を見る。動かすとピチャと水滴が机の上に落ちた。

紅い、水。

少し濁っていて、鉄が錆びているような異臭を発するソレに亘屢は我が目を疑った。

背を冷や汗が伝う。

「ウワアアアッ」

その叫び声に、亘屢は顔を上げた。隣の席の男子が、顔を…正確には目を押さえている。

ぼとりと床に落ちた何かに目を移すと、亘屢も声にならない悲鳴をあげた。

声が喉奥に引っかかり、ヒツと短い悲鳴。

球体のソレは水分が薄い膜に凝縮されているようなモノ。多少血走っているソレは明らかに人間の眼球。

ソレが二つ床に落ちたのだ。

「キヤアアッ！」

次に聞こえたのは女子の声。

あるはずの右腕が無くなっており、白い制服が血に染まっている。四方から聞こえてくる男女の悲鳴に、香ってくる血の匂い。

「何…何だよコレ……」

一歩足を踏み出すと上履きの布が一瞬にして赤く染まる。その感触に亘屢は思わず壁に手をついた。

「裕也！」

思い出したように後ろを振り向くと裕也が目を見開いて壁に寄りかかっていた。

未だこの不可解な現象が襲い掛かっていないのに安堵した亘屢は裕也に手を伸ばす。

「裕也つ、逃げよう！」

次々と倒れてゆくクラスメイトを避けながら亘屢は必死に手を伸ばした。

「亘屢つ……」

震えながらもその手を掴んだ裕也はゆっくりと壁から背を離す。

「亘……」

安心しきった表情になった瞬間が、一番の隙だった。

「裕也あああつ！」

横から襲い掛かってきたカッターが裕也の肩を掠める。裕也の苦痛に歪んだ顔に刃が近づいてくる。

「うわああっ！」

近くにあった教科書でソレを防ぐと亘屢の手を掴んで一気に走り出す。廊下に飛び出してみると他のクラスも同じ状況。

ドアから除いてみると生き残ってる人間なんて一人もいない。

「何、で……」

空を見上げると、先ほどの黒い太陽は無くなっていた。

## #4 夢

「何で……」

ふいに、裕也が呟く。夢かと思い、目を閉じて再度開いても先ほどと同じ光景。

「何でだよ……」

「さっきまで、普通の学校だったよな？」

かくんと膝が地面に付く。

気持ち悪い。

汚い。

眩暈がする。

「さっきまで、だ。」

冷静に亘屢が言った。まるで信じられないとも言つような眼が、亘屢を見る。

「さっきまでは普通だった。でも今は……」

亘屢は震えを隠すように掌を握り締めた。眼前に広がる紅。

急に襲ってきた圧迫感に、息が詰まる。先ほどまで広がっていた紅に重なるように裕也が亘屢の前に立っている。

「……離せよ。」

「お前…… 何でこんな状況で笑ってられんだよッ!？」

「笑ってる?……俺が?」

「他に誰がいるんだよ!!」

胸倉を掴んでいる手の力が、強くなる。亘屢はゆっくりとした動作で自分の口元に触れてみた。

少しだがつり上がっている口の端。口元を隠すように掌で覆つと一気に嘔吐感が込み上げてくる。

「ぐっ……」

喉まで上がってきたそれを何とか抑え、口から手を離した。それほど同時に裕也の手が離れる。

ゲホと何回か咳き込み、亘屢は視線を足元へと移した。つうと流れてくる血に躊躇いも無く足を踏み入れる。

「…黒い、太陽……」

「は？お前何言ってるんだよ……」

心配半分、驚き半分で亘屢の顔を覗き込んできた裕也の表情が固まった。

「ねえ、カイ。黒い太陽って知ってる？」

「黒い太陽？何だよ、それ。」

「何かさ、それに魅入られると死んじゃうんだって。爺様が言ってたよ？」

「お前なあ…爺の言ってることいちいち間に受けてどうすんだよ。」

「うわあああ！！」

「お、おい！亘屢！？」

頭の中に流れ込んできたモノに、亘屢は絶叫した。見た事の無い風景、見た事の無い女。

『カイ』

「あ、ああ……ッ」

自分の重さに耐え切れず、思わず膝をつく。震える手で頭を抱え込み、俯いた。まるで首を締められているかのように息が出来ない。

「わたるっ…！亘屢！！」

「来るなっ…来るな来るな来るなあ！！」

パシと小気味よい音が、廊下内に反響する。のろのろとした動作で手を多少赤らんでいる頬に添えた亘屢は、信じられないとも言っ

ような表情で裕也を見上げた。

「落ち着け、亘屢！！！」

「裕、也……？」

「何言つてんだよ黒い太陽だかなんだか知らないけどなあ！！今はそんなこと言ってる場合じゃないんだぞ！！」

周り見るよ、と怒鳴られて亘屢は焦点の定まらない瞳で、辺りを見回した。そしてヒツと、喉奥で声にならない悲鳴を上げた。

ドアに付着している血液に混じる肌色の肉片。手すりに引っかかっている長い髪。それに重なるように乗っている明らかに先程まで血が通っていた腕。

生徒の物と思われるシルバーのフレームの眼鏡。

「ここ、学校だぜ？」

「……………ッ」

「さっきまで、みんな生きてたんだ」

「……………みんな、生ない」

「学校で生き残ってる俺たち以外は…全滅だろ」

何で、と言いそうになって口を噤んだ。心臓の音が聞こえてくる。

誰の心臓の音だ。

……………俺？

これは、俺の心臓の音なのか？

ワイシャツの胸の辺りを力強く握り締める。すると急に冷たい感触が肌を伝わってきた。

オマエガ……

え……………？

コロシタ

白の布が、赤く染まっていく。別に怪我をしたわけでも、なんでも

ないのに。

「う、あ……………」

「亘屢？…………どうしたんだよ……………」

眉根を寄せた裕也は、亘屢の手を引いて昇降口まで連れていく。大きく息を吐き、ワイシャツを見ると先程まであったはずの染みが消えていた。

所々に散らばっている死体を避けながら、一步一步と昇降口まで向かう。

「…なあ、裕也」

「何だよ」

「何でそんなに…冷静でいられるんだよ？」

その質問に、裕也は足を止めた。つられて足を止めた亘屢は不思議そうに目を細めた。

「答えたら…俺の質問にも答えてくれるか？」

一瞬目を見開き、頷く。裕也は溜息を吐くと亘屢に向き直った。

「…こうなるかもしれないって、思ってたんだ」

「は？」

「だから！…こんな風になるって、思ってたんだよ」

「なん……………」

「夢」

その言葉に、息を飲む。体中の汗腺から、汗が吹き出しているのが分かる。

「前々から変な夢見て…学校で、こんな風になって…お前と逃げるって変な夢。まさかとは思ってたけど現実になっちまうなんて…」

「…」

「…………そう、か」

亘屢は首を横に回して空を見上げた。雲ひとつない快晴。ただ何時もと違うのは。

(…音が、聞こえないな)

何時も喧しいくらいに聞こえてくる鳥の囀りや、近くの公園で遊んでいる子供の騒ぎ声。

その子供たちの見張り兼近所の奥様連中との世間話の声。車のエンジン音や工事現場の音。

この世の音と言う音が何にも聞こえてこない。

「こっちから質問だ」

「あ…？」

「何で…何でさっき…笑ってたんだ？」

『……離せよ』

『お前……っ何でこんな状況で笑ってられんだよッ!?!』

『笑ってる?……俺が?』

『他に誰がいるんだよっ!?!』

「……分からねえ」

「分からねえって……あの状態で冷静にいるよりも笑ってるほうがよっぽど可笑しいぜ?」

呆れたように言葉を出した裕也はまるで、辛いのを我慢しているようだった。

## #5 知らない

音がない理由が分かった。

学校から一歩足を踏み出すとそこは地獄絵図。  
学校の中よりも、酷い。

音がないどころじゃねえ……これじゃ……『生命』すらないじゃねえか  
……

「はは…亘屢、訂正だ…『学校』どころじゃねえ……『日本』でかも…しれない」

「『世界』で、とか？」

「さすがにそれはヤバイだろ……」

笑い事じゃないとは理解してる。でも。

悲しむことも、怒ることも、何も出来ない。

頭の中が真っ白で。

「なあんでこんなコトになってるんだよ」

「これで死んだ奴がゾンビになってたらヤバイよな……」

「オイオイ、そんな映画無かったっけ？」

無理してでも笑わないと、自分が壊れてしまいそうで。

亘屢はガードレールに引っかかっていた黄色い帽子を手にとると、握り締めた。

幼い園児の物であつただろうそれには所々血が付着しており、この持ち主も死んだのだと、理解した。

何故、生き残ったのだろうか。

『オマエガコロシタ』

先程の幻聴が、再度脳内によぎる。

『逃げるオオオ!!』

『来るな人殺し!!』

「なっ……!!」

突如辺りを火に囲まれる。ガラガラと音を立てて崩れていく家。必死になって逃げ惑う人々。

何から?…俺から?

『あれは、仕方がなかったのだカイ!!』

『仕方なかっただあ!?!ふざけるんじゃない!!』

意に反して、勝手に言葉が出てくる。手には身の丈近くの大きさの大刀。

血が、べったりと付いている。

『人の母親を勝手に化け物だ、鬼だなんだとぼざいて殺すことが仕方ねえってのかよ!!』

命乞いをしている男の喉元に、刃が深々と突き刺さった。ピツと飛び散った血が頬を掠める。

『やめて、カイ!!』

『っ、アヤ!!お前だつてコイツらに親父さんとお袋さん殺られたんだろぅが!!』

何で止めるんだよっ!!』

『カイが人殺すとかなんか見たくない!!』

そう叫びながら必死にしがみついてくる女。学校で浮かんだのと同じ女。

アヤ……?誰だよ、お前。

『だけど!!!!』

『ウワアアア！！助けてくれええ！！』

その悲鳴に、俺とその女は同時に振り向いた。  
空を覆い隠さんばかりの黒い太陽。

『黒い…太陽……？』

『爺様が言ってた黒い太陽って…これ……？』

急に太陽から光が発せられる。丁度太陽の下辺りに伸びているその光の筋は、黒い。

それに当たった人の肉片が、飛び散った。

そしてその光は、まるで意思を持っているかのように、移動を開始した。泣き叫び、逃げ惑う人々を包む黒光。

包まれた人々は、先程の人間のように 散った。

『っ！逃げるアア！！』

アヤの後ろまでその黒光が迫ってきている。『俺』は必死に手を伸ばした。

『！！！！』

彼女を助けたくて伸ばした手を、彼女は振り払った。優しく、微笑んで。

『何、で……』

『逃げて…カイ……』

唇だけを動かして、『俺』に何かを言っていた。

『ア……』

何故あの時俺は……

『アヤアアア！！！！』

『彼女』の最後の言葉を、聞き取れなかったんだろう？

生温かい彼女の血が、『俺』に降り注ぐ。

黒い太陽は、彼女の命を奪い、消えた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1004a/>

---

EPITAPH

2010年10月22日00時27分発行